
はじまりの森

おおら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりの森

【Nコード】

N6487C

【作者名】

おおら

【あらすじ】

この世に存在する影の生き物“魔物”。森に捨てられ心を闇に染めた魔物の子から始まる物語。

プロローグ

この世界には、二種類の生き物が存在した。

神の意志によって生み出された生き物。それはつまり獣、鳥、魚、虫たち、そして人間を意味する。

そして、神の意志に反して生まれてきた生き物。彼らは“魔物”と呼ばれた。

“魔物”は影の生き物と蔑まれ、次第に数を減らしていった。しかし、数少なくなった彼らは不思議な力を持つようになった。

“魔物”たちはさまざまな生き方を選んだ。

人間の街に隠れ住む者、人気のない森や山でひっそりと暮らす者。そして、中には人間を襲う者も現れた。

第1話 まもの森

長く伸びた紅色の雲が地平に横たわっている。そんな黄昏の空の下に、森があつた。樹齢千年を越しているであろう巨木が、何本も立ち並び、その枝を複雑に絡め合っている。格子状に絡んだ枝と茂る葉で、森の土に光はあまり届かない。

その巨大な樹の、巨大な枝の上に、一匹の生き物が座っていた。人間の赤ん坊のような姿だが、肌は黒色。そして腕が異常に長く、不気味な仮面を被っている。その生き物が仮面を片手で上にずらすと、大きな赤い目玉がのぞいた。

世間では、“魔物”と呼ばれる生き物だった。

その魔物は、何かの気配を感じ取ったのか、帽子を深く被るように仮面を下ろし、赤目を潜めた。

その直後、魔物の座っている樹のすぐ後ろに、爆音のような羽音を立てて、巨大な蛾が舞い降りた。それを認めた魔物は口元でニヤリと笑った。

蛾は森の上空に降りると、高い樹の上に何かを置いた。蛾が前脚を離すと、そこにいたのは小さな少年だった。

少年は怯えるように目を閉じていたが、やがてゆっくり瞼を上げた。するとそこにいたのは、空の雲にも劣らぬ巨体ではなく、ただの女性だった。女性は仏頂面で少年を見下ろしている。

「あなたはもう、いらないの。」
女性はそう呟いた。そして次第に頬を釣り上げ、歪んだ笑みを浮かべた。

「これで自由だ!!!」

女性の絶叫と同時に、女性の皮膚が弾け飛んだ。その中から触角昆虫の足、そして巨大な羽が飛び出した。女性の目は大きく飛び出し、変色して、女性は蛾の姿となった。

蛾は爆風を起こしながら舞い上がった。その風に煽られ、枝の上から落ちないように必死に踏張っていた少年は、夕闇に消えていく蛾を茫然と見つめていた。

辺りに静けさが取り戻された。未だ同じ枝の上にぽつんと立ち尽くしている少年の目は、焦点があっていなかった。

自分に何が起こったのだろうか。どうして自分はここに立っているのだろうか。全ての謎が、幼い少年の頭を支配した。

黄昏は、無情なまでに沈黙を保ち続けた。しかし、そんな沈黙は突然破られた。

「ケケツ、哀れな子供だね」

少年ははっと我に返り、周囲を見回した。しかし、声の主は見えない。

再び少年が目を戻すと、そこにあったのは、二つの大きな赤い目玉。「だあい好きなお母さんに、置いてきぼりにされちゃったね」

仮面の魔物が、少年の顔を覗きながら薄ら笑いを浮かべていた。少年は驚き、顔を強ばらせた。

魔物はククツと小さく笑い、ふっと浮かび上がった。

「本当のこと、教えてやろうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6487c/>

はじまりの森

2010年10月28日07時27分発行